

審査概要

本論は本文として400字詰め用紙299枚(119,600字)に、305ページに及ぶ資料編を添えた大部なものである。論題は「親鸞における女人往生思想の研究」となっているが、漢訳大乘経典、七祖から親鸞、蓮如に帰着する真宗の女人往生思想について論じたものである。それゆえ、題号に「親鸞」と限定していること、蓮如の『御文』の所説に帰着していることに違和感を覚える。むしろ「親鸞浄土教における・・・」とか「真宗における・・・」としたほうがより内容を的確に示していると思われる。

さて、第一章は、「漢訳大乘経典にみる女人往生思想」と題して、『摩訶般若波羅密経』、『大寶積経』などの漢訳経典における女人往生の所説を紹介する。「仏国土に女人がないこと」「再び女身を受けないこと」「男女の差別なし」「性転換」などの所説を記す。そして、その共通点として「永劫修行」「権化の女人」「変成男子」を上げる。しかし、膨大な量の漢訳経典をたいへんな努力を払って、キーワードを軸に整理しているが、経典の成立や翻訳の前後関係、成立の問題点など全く考察されず、取り上げている経典の説明もない。全経典を横一列に扱い、機械的にキーワードの使用回数などを問題にしているが、資料の吟味、批判が必要である。ただ、膨大な一切経の中からこの問題についての記述を探し出した労力と根気には敬服する。

次の第二章「七祖における女人往生思想」においても、真宗七祖の著作の中から「女人」の使用回数を紹介するが、著作の真偽が定まらないものもあり、回数そのものの数の調査はあまり意味をなさないように思う。それよりも主要経典を対象として論じたほうが的確である。龍樹の中観、空の立場から非男非女説の解釈、世親の女人根欠二乗種不生、善導の韋提希救済の解釈、法然の凡夫・女人の解釈などの論及は興味深い。

次の第三章「親鸞における女人往生思想」では、「変成男子の願」の願名について、それが『法華経』によったところの、あくまで三十五願の願名であり、親鸞はその意味に重きを置いていなかったという立場に立ち、逆に女人正機の立場に立つと主張する。この主張には親鸞が韋提希の救済をどう見たかという論及が必要である。また、親鸞の和讃の「女身をいかでか転ずべき」からこの「転」を「転悪成徳」の「転」と解釈し、「即」の論理に解釈するが、果たしてそのように解釈できるか疑問である。同じ「転」の字が使われているが、短絡的におなじと考えるのは、早計といわねばならない。また、親鸞の立場を考えるのに、いきなり蓮如との比較が出てくるのにも違和感を感じる。

ところで、親鸞では女人往生は多くは語られないが、蓮如になると「五障三従」など女人の問題が大きくクローズアップされる。その背景に、14,5世紀の南北朝以後の日本社会の大きな変動があったことが歴史家によって指摘されている。この考察なくして蓮如の女性観は語れないのではないか。

最後に、第四章『御文』にみる蓮如の女人往生思想が本論文の最も主張したいところである。『御文』の「五障三従」の言に注意し、国語学的な視点からその用法を検討し、「五

障三従トテ」とか「われら悪人女人」といった使い方から、蓮如が女性を差別していたのではなく、当時差別されていた中で、逆に、女性こそ救われねばならないと、女性救済を積極的に進めたとの解釈である。先学の所説を引用しての論理展開であるが、引用があまりにも長いのと、新たな展開と解釈が望まれる。

全体を通して、学術書ではなくて一般書が用いられているが、論拠としてこれらは不適當である。また、あえて言えば、法然の消息に見られる立場、親鸞の「女犯偈」、親鸞の韋提希觀などについても考察してほしかった。

しかし、概ね緻密な作業を行い、丹念に経典や聖教を読んで大部な論文に仕上げている。また、基礎的な概念の修得、一つのテーマについての研究が本人なりに完成しているので博士論文として「可」の評価を与える。